

“Godliness”における主人公たちのグロテスク性

小 園 敏 幸

Sherwood Anderson (1876-1941) の名声が1920年代に極めて高かったことを物語っているのは、彼が T. S. Eliot を抜いて、1921年12月に第1回『ダイアル』誌賞として2,000ドルを受賞したことである。そして第2回『ダイアル』誌賞として T. S. Eliot がその栄誉を勝ち得たのである。Anderson が『ダイアル』誌賞に輝いた、その2, 3年後に、Virginia Woolf (1882-1941) をして *The Saturday Review of Literature* の中で、次のように言わしめている。

“Of all American novelists the most discussed and read in England at the present moment are probably Mr. Sherwood Anderson and Mr. Sinclair Lewis.”

これは、取りも直さず、Anderson が1919年3月に彼の文学的縮図とも言うべき代表作、*Winesburg, Ohio* を刊行していたことが誘因であることは言を俟たない。

Winesburg, Ohio の素材は、人間を規格化する機械文明の社会に即応出来ずに孤独と欲求不満に喘ぎながら、それでも尚、人間性の回復を求めて精一杯に生きようとしている素朴な人々に向けられている。Anderson は彼らや彼らの生活を単に新聞記者的に外面描写するのではなくて、その内面を捉えて、所謂、当時流行をきわめた Sigmund Freud (1856-1939) 理論の援用（実際には、Anderson は Freud を読んだことはなかった⁽¹⁾）により、人間の無意識的抑圧から生じる心の歪みや願望の追求を心理描写している。

従って、*Winesburg, Ohio* という作品を真に理解するには、Freud 理論を援用して精神分析的に考察する必要がある。しかし、日本では Anderson の著作は多くの作家に読まれ、学者に研究されてはいるものの、所謂、研究書の類は実に数冊にとどまっている。特に、精神分析的に考察されたものに至っては、内外を問わず皆無に等しい。

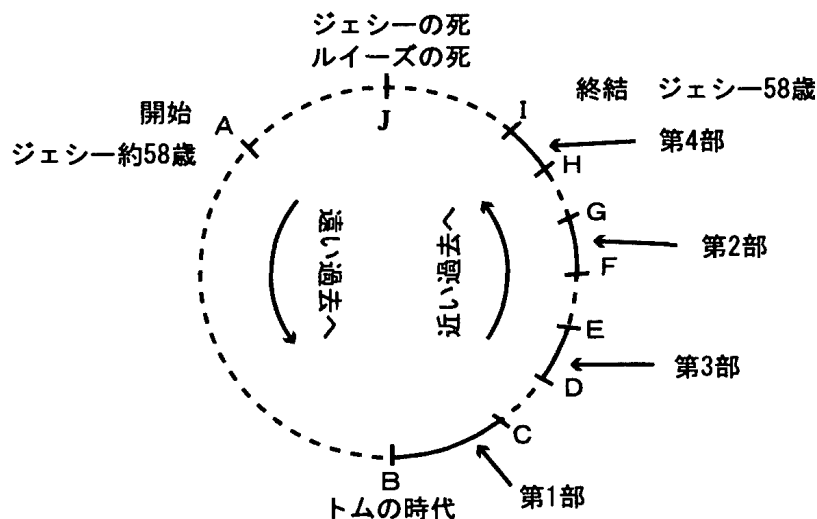
今回、研究対象にしている4部作“Godliness”は *Winesburg, Ohio* の中に

収められている。“Godliness”に関する論文は1967年7月にアメリカで1本、そして同じ年の12月に日本で1本、1979年3月に日本で1本、結局、1919年から2003年までに内外で僅か3本あるだけである。

20世紀批評姿勢の最大の遺産は精読である、と言われていることを踏まえて、4部作“Godliness”を考察していくが、英文和訳も一つの解釈であるので、4部作“Godliness”からの引用については敢えて和訳を記すことにする。(尤も、誤解を招くような英文は絶無であるが。)

“Godliness”は4部から構成されており、扱われているタイム・スパンは4世代に亘っている。この作品の研究目的は“Godliness”の第1部から4部までの物語の構成を解剖分析し、この作品の主人公とみられる3人、即ち、トム・ベントリー(Tom Bentley)の息子ジェシー・ベントリー(Jesse Bentley)、ジェシーの娘ルイズ(Louise Bentley)、そして彼女の息子デイヴィッド・ハーディ(David Handy)を精神分析的に考察し、その結果に基づいてこの作品のテーマを見つけ、更に *Winesburg, Ohio* のモチーフである grotesque の面から論究することである。

次の円はこの作品の構成の解剖分析をするために、第1部から第4部までの物語の進展を図解したものである。



Aは第1部の物語の開始を示している。

There were always three or four old people sitting on the front porch of the house or puttering about the garden of the Bentley farm. Three of the old people were women and sisters to Jesse. They were a

colorless, soft-voiced lot. Then there was a silent old man with thin white hair who was Jesse's uncle. (2)

(ベントリー農場では、いつも3, 4人年寄りが家の正面のベランダに坐りこんでいるか、庭で仕事をのらくらしていた。年寄りのうち3人は女で、ジェシーの姉妹であった。彼女たちは質素で、もの静かな口調の連中であった。それから、ジェシーの伯父にあたる、うすい白髪が無口な老人もいた。)

これが物語の冒頭の部分であり、次いで、ベントリー農場内にある家は丸太の枠に板を打ちつけた木造の建物であることが語られ、その建物の内部についても知らされる。更にベントリー農場で働く人達の紹介へと続いている。

Beside the old people, already mentioned, many others lived in the Bentley house. There were four hired men, a woman named Aunt Callie Beebe, who was in charge of the housekeeping, a dull-witted girl named Eliza Stoughton, who made beds and helped with the milking, a boy who worked in the stables, and Jesse Bentley himself, the owner and overlord of it all. (p. 56)

(既述の年寄りたちの他にも、ベントリー屋敷にはたくさんの人達が住んでいた。4人の作男、家事をみているキャリー・ビーブ小母さんと呼ばれている女、ベッドを整えたり乳しぼりの手伝いをしている、エリザ・スタウトンというのろまの娘、馬屋で働いている少年、そしてこの農場の所有者であり大君主であるジェシー・ベントリーそのひとがいた。)

Aの部分では、plotの進展はなく、単にベントリー農場の内部のことや、それを背景として暮らしている人物の紹介をしているにすぎない。即ち、Aの部分は exposition である。

ベントリー農場の所有者であるジェシーはこの時、約58歳である。

Bは円周上の最下部で、物語の中では時間的には最も遠い過去を示している。

cut-backの手法により、物語はAからBまで遡る。

Bの時点でのベントリー農場の所有者はジェシーの父親トム・ベントリーであり、Bの部分でベントリー農場の歴史についても少し触れている。

オハイオ州北部にベントリー農場があり、ベントリー家はまだこの地方が未開地で土地が安く手に入った頃に、土地を手に入れて、ニューヨークから移住してきた、数代続いた家柄である。農場の所有権がトム・ベントリーの手に移った頃には、開墾の困難な仕事は大部分終わっていたが、彼の息子たちはまるで追い立てられた動物のように働いた。

BからCまでの実線は第1部の物語が語られている部分で、物語はBからCへと chronological order に進展して行く。

やがて、南北戦争が始まりベントリー家の運命に急激な変化をもたらすことになる。即ち、トムの5人の息子達のうち末っ子のジェシーを除いて他の4人は、即ち、イノック、エドワード、ハリー、ウィルは兵役を志願し、戦死してしまったのである。

ジェシーは学者になり、結局は長老教会の牧師になるつもりで、18歳の年に家を離れて学校に行ってしまう。

トムは自分の手で農場を経営してみようとしたが、うまくいかない。そのうちに一年ばかり前から健康をそこねていた彼の妻が急に亡くなり、彼もがっかりしてしまう。

やがて、末っ子のジェシーが呼びもどされて農場経営を引き受けなければならぬ羽目になったのである。その時、彼は、22歳でほっそりした敏感そうな青年であった。

南北戦争がジェシーの人生を180度転換させてしまったのである。ジェシーはよもや4人の兄達が全員戦死するとは思ってもいなかったのであろう。

ジェシーがベントリー農場の経営を引き受けなければならなかったことが、彼の人生の分岐点である。

少年時代にもジェシーはずっと、所謂「除者の羊」(odd sheep)であったし、兄達との仲もじっくりいっていなかったのである。母親だけが彼を理解していたが、その母親も今は亡くなっていたのである。ジェシーが600エーカーを越える農場を経営するために帰ってきた時には、ワインズバーグの住民達は4人の屈強な兄達のしてきた仕事を彼がひとりできりまわそうなどと企てていたことを笑う。ジェシーは小柄で、女性の様な身体つきで、全然一人前の男には見えなかったのである。彼の妻のキャサリンも虚弱であった。

ジェシーはその頃周囲のすべての人間に対して冷酷であり、妻に対しても同様に冷酷であった。

ジェシーの内部には殺しても容易に死なないようなものが潜んでいた。彼は一種の狂信者であったのである。彼はその時代とその土地が生み出した人間であり、そのために自分も苦しみ、人も苦しませたのである。彼は今までに何を手に入れても一度として満足したことがなかったし、自分が一体何を望んでいるかも悟ってはいなかったのである。

彼は次第に周囲の人達から恐れられるようになっていった。やがて、トムは農場の一切の所有権を彼にゆずり、隠居してしまう。ジェシーは、若さと無経験さともかかわらず、使っている人達の魂を支配する駆け引きを心得ていたのである。彼は周囲の人達をかつてない程働かせたが、彼には何の喜びもなかったのである。彼は昼となく夜となく農場について考え、限りなく農場を成功させるための計画に没頭する。彼は自分の農場にこの州のどの農場もかつてあげえなかった程の生産をあげさせたいと望んでいる。彼の中の不明確な飢えにかられて、彼は人前ではますます無口になる。彼は心の安らぎを勝ち取るためならば、どんなことでもしたであろうが、彼の中にはそれを勝ち取れないという不安があった。

ジェシーは子供の頃から異常な程生気に満ちており、学生時代には全身全霊を傾けて神や聖書について学び、考えた。時が過ぎ、彼は人間というものをよりよく知るようになるにつれて、自分が特別な人間で、周囲の人達とは別種の存在であると考え始めたのである。

ジェシーの心は自分と同様に土地や家畜を所有していた、旧約聖書時代の人達の所へ帰っていったのである。彼は神が空から舞い降りてきて、それらの人達に話しかけたことを思い出し、神が自分にも注目して、話しかけることを望んだのである。彼は何とかして神に接することを望み、その熱心さのあまり声を出して神に祈りをささげる。

“I am a new kind of man come into possession of these fields,” he declared. “Look upon me, O God, and look Thou also upon my neighbors and all the men who have gone before me here! O God, create in me another Jesse, like that one of old, to rule over men and to be the father of sons who shall be rulers!” (p. 64)

(『私はこれらの畑を所有させていただくようになりました新しい型の人間でございます。どうか神様、私に御目をお向けくださいますように、

そしてまた、私の隣人達や私の先祖に御目をお向けくださいますように！どうか神様、昔のジェシー（エサイ）のように、人々を治め、統治者となるべき息子を持つ、もうひとりのジェシーを私にお造りくださいますように！』)

ジェシーは生まれた時から空想好きで、内に知的情熱を秘めていただけに、神に心を向けていたのである。彼は、旧約聖書の中に、主がもうひとりのジェシー（エサイ）のところに姿を現わし、彼の息子ダビデを、サウルとイスラエル人がエラの谷でペリシテ人と戦っているところへ派遣するように命じていることを思い出す。ジェシーの頭には、ワイン・クリークの谷間に土地を所有しているオハイオ州の農民はすべてペリシテ人であり、神の敵である、という確信が生まれる。

円周上のCの時点は第1部の物語の conclusion を示しており、すでに物語はその直前まで進められてきたのである。やがて、ジェシーは自分こそまさに第二のエサイ（Jesse）だと確信し、神の下僕であることの至福を挙握せんがために神への祈りをささげるのである。ジェシーの運命を決定的なものにしたこの時点が、第1部の climax であり、同時に第1部の終結部である。

“Jehovah of Hosts,” he cried, “send to me this night out of the womb of Katherine, a son. Let thy grace alight upon me. Send me a son to be called David who shall help me to pluck at last all of these lands out of the hands of the Philistines and turn them to Thy service and to the building of Thy kingdom on earth.” (pp. 68–69)

（『万軍の主、エホバよ、私にキャサリンのおなかから息子をお授けくださいますように。あなたの恩寵を私の上に垂らしてくださいますように。どうか私に、私を手助けして、最後にこれらの土地のすべてをペリシテ人の手から奪い取り、彼らをあなたに仕えさせ、あなたの地上の王国の建設に奉仕させることが出来ますような、ダビデと名づけられる、息子をお授けくださいますように』とジェシーは祈った。）

第1部の物語はここで終結しているが、ジェシーの妻キャサリンは毎日、日の出から夜遅くまで働き、やがてお産をして、まもなくこの世を去った、ということが補足的に語られている。

物語は第2部に移行するが、その開始は円周上のGの部分であり、同時にGの部分が第2部の終結でもある。即ちGは、ジェシーの孫のデイヴィッド・ハーディが既に12歳になっており、ジェシーの希望から、デイヴィッドがベントリー農場に引き取られて暮している時点を示している。

第2部は回想形式 (form of retrospection) による物語である。

オハイオ州ワインズバーグのデイヴィッド・ハーディ (David Hardy) はベントリー農場の所有者であるジェシー・ベントリーの孫である。彼は12歳の年にベントリー農場に引きとられる。彼の母親のルイズ・ベントリーは、ジェシーが息子をお授けくださいますように、と神に哀願した夜にこの世に生まれてきた娘であり、農場で成人して、後に、銀行家のジョン・ハーディ (John Hardy) と結婚する。ルイズと彼女の夫との仲はうまくいっていない。彼女は鮮明な灰色の眼と黒い髪をした小柄な女性である。彼女は子供の頃から癩癩を起しやすく、腹を立てていない時でも、陰気で、黙りこくっていた。銀行家である彼女の夫は用心深い抜けめのない男であったが、彼女を幸福にしてやるためにはできるだけのことをしたのである。しかし、ルイズは幸福になれそうになかった。彼女はよく気違いじみた癩癩を起した。そんな時には、彼女は黙り込んでいることもあれば、やたらに人に食ってかかることもあった。ある時には、彼女は台所から庖丁を持ち出してきて、夫を殺しかかったりした。また、ある時には、故意に家に火をつけたこともあった。

次に、物語はカット・バックの手法により、Gから数年前のFの時点に遡る。即ち、Fはデイヴィッドが両親と共にワインズバーグで暮している時点を示している。物語はFの時点からクロノロジカル・オーダーに進展し、Gで終結するのである。

デイヴィッド・ハーディ少年はこのような母親に育てられたので、彼の子供時代があまり楽しいものではなかったことは想像するにかたくない。デイヴィッドは常に穏やかな従順な少年で、彼の眼は褐色で、子供の頃には、実際には何も見ていないのに、じっと長い間、物や人を見続けている癖があった。彼は自分の母親が人から無情なことを言われているのを聞いたり、母親が父親を叱っているのを聞いたりすると、彼は怯えて逃げ出し、物陰に隠れたりした。隠れ場所がない時には、樹か、家の中なら、壁に顔を向けて、眼

を閉じ、何も考えないようにした。彼は独言を言う癖があり、幼い頃から、物静かな悲しさにとらわれていたのである。

デイヴィッドもベントリー農場の祖父の家に遊びに行っている時には、とても満足し、幸福だった。

かつて、デイヴィッドは長い間農場に滞在して家に帰った時に、ある事件が起き、それがいつまでも彼の心に影響を残していた。その時、彼は自分の家のある通りのはずれまで帰ってきていた。秋の夕方の薄暗い頃で、空は雲におおわれていた。ふとデイヴィッドに魔が差す。彼は両親の住んでいる家に入って行くのが耐えられなくて、衝動的に家から逃げだそうと決心する。彼は祖父の農場に帰るつもりだったが、道に迷い、怯えて泣きながら、何時間も田舎道をさまよう。やがて、雨が降り出し、空には稲光がした。彼の想像力はかきたてられて、彼は暗闇の中で異様なものが見えたり、聞こえたりするような気がした。彼のまわりの暗闇は限りなく広がっているように見え、木立をざわめかせている風音にも彼は恐怖を感じるのであった。一人の百姓が、丁度そのあたりを通りかかって彼の泣き声を聞きつけて、彼を両親の家に連れて行ってくれたのである。その時は既に町ではデイヴィッドが誘拐されたという知らせがワインズバーグの街をかけめぐり、警報が発せられ、ジョン・ハーディは町の人達を連れて田舎に捜しに行っていたのである。母親がデイヴィッドを出迎えてくれる。彼女はまるで別人になったように、彼をひしと抱きしめる。彼女は彼を風呂に入れてやり、食べ物を用意してやる。彼が寝まきに替えてからも、彼女は灯を消し、椅子に坐って、彼を膝の上に乗せて抱いている。今の突然、人が変わってしまったような優しい母親に接することが確かであったら、デイヴィッドはあの怖ろしかった田舎道での経験を千度でも喜んでくれるのにと考えたのである。

デイヴィッドは12歳の時にベントリー農場に引きとられる。ルーズは息子を失ったことで人生に急激な転機をもたらし、夫と争う気持ちも失ってきた様子であった。

ジェシーは今ではワイン・クリークの谷間の農地を殆ど所有していたが、デイヴィッドが来るまでの彼は失意のどん底の人間であった。ジェシーは男児に恵まれたような喜びを覚え、ついに自分の祈りが神に聞きとどけられたのだと思うようになる。

ジェシーの心には生涯を通じて二つの作用がある。その一つに、彼は神の下僕に、しかも神の下僕のうちでも指導者に、なろうとしていた。もう一つは、彼は南北戦争後に成人した人間であったために、その時代のすべての人

達と同様に、近代工業主義の生まれかかっていたこうした時代に、この国を動かしていた諸種の影響を強く受けていたのである。即ち、彼は土を耕すことによって作るよりももっと速い方法で金を作りた望んでいた。

デイヴィッドにとっては、農場での生活はまさに楽しい愉快なことばかりで、まわりの者達から親切にしてもらおうおかげで彼の控えめな性質も、遠慮がちな態度も徐々になくなっていったのである。

ある日、ジェシーとデイヴィッドは二人きりで森の奥に入っていった時、ジェシーは神に向かって熱狂的によびかける。

“Make a sign to me, God,” he cried, “here I stand with the boy David. Come down to me out of the sky and make Thy presence known to me.” (p. 86)

(『神様、どうか私にお印をお示くださいますように。私はデイヴィッド少年とともにここに立っております。どうか私のところに空から舞い降りて、私にお姿をお見せくださいますように』)

デイヴィッドはジェシーの祈りの姿を見て、恐怖のあまり、自分の肩にかけていたジェシーの手を振り放して、その場を逃げ出す。しかし、途中で彼は怪我をして、気がついてみると、ジェシーに抱かれて馬車に乗っていた。デイヴィッドは老人の手が怪我をした頭をやさしくなでてくれているのを知った時、ようやく恐怖感は去る。

第3部 ‘Surrender’ (「身を委ねる」) に於いては、結婚前のルーズについて語られている。

第3部の開始は円周上の E の部分である。

The story of Louise Bentley, who became Mrs. John Hardy and lived with her husband in a brick house on Elm Street in Winesburg, is a story of misunderstanding. (p. 88)

(ジョン・ハーディ夫人になって、ワインズバーグのエラム街のレンガ建ての家に夫と共に暮らしているルーズ・ベントリーの物語は、誤解の物語である。)

この提示部から、読者は suspense を感ぜざるをえない。既に第2部に於

いて、ルイズの性格が語られ、彼女とジョン・ハーデイの結婚生活がどのようなものであるかが読者に知らされているだけに、ルイズの物語が如何なる「誤解」の物語であろうか、という興味を読者は抱かずにはおれないのである。

Eの提示部からカット・バックの手法により、Dの時点まで遡り、そこでは、わずかにルイズの幼児期に触れ、次に時は大きく進み、彼女が15歳になってワインズバーグ高等学校に通うためにハーデイ家に下宿した時点を示している。

第3部は、結局、Eに始まり、カット・バックの手法でDまで遡り、そこからクロノジカル・オーダーに物語は進行し、Eの部分で終結するのである。故に、第3部は回想形式による物語である。

ルイズは、華奢で過労気味な母親と、女の子の生まれることを喜ばなかった衝動的で無慈悲で想像力に富んだ父親との間に生まれた子供であったので、彼女は幼い頃からノイローゼ気味で神経過敏な女性であった。

彼女はベントリー農場で暮らしていた少女時代も無口で、何よりも愛情に飢えていながら、愛情を掴むことができなかった。

彼女はワインズバーグ高等学校に通うためにジェシーの友人アルバート・ハーデイ (Albert Hardy) の家に下宿し、週末だけ農場に帰るという生活を送ることになる。

アルバートには2人の娘とジョン・ハーデイという息子が1人いる。娘2人は勉強嫌いの遊び好きで、若い男のことで頭がいっぱいだった。

ルイズは農場にいた時と同様に、ワインズバーグに来ては幸福ではなかった。彼女は世の中に出て行ける時のことを何年間も夢みていたので、ハーデイ家に下宿するのは解放への第一歩であると思っていた。彼女にとっては、町は華やかで活気に満ちており、男も女も楽しく自由に暮らし、友情や愛情を気軽に与えたり与えられたりしているように思われる。何の楽しみもないベントリー家での生活の後だけに、彼女は暖かい家庭の雰囲気接することを夢みていた。彼女の憧れ求めていたものは多少は得られたが、勉強熱心な彼女はハーデイ家の遊び好きな娘たちとは気が合わず、全く孤立してしまう。

ルイズに宛行われた部屋はハーデイ家の2階の一室で、窓から果樹園が見おろせる。下宿して2ヶ月目には、ルイズはハーデイ家の娘たちと親しくなることをすっかり諦めてしまい、夕食後は自分の部屋に引っ込むように

なる。彼女は毎晩部屋に薪を運んでくれるハーデイ家の息子ジョンと親しくなろうと考え始める。彼女はジョンのうちにこそ自分の憧れを求めていたものが見つかるかもしれないと思うようになる。

ルイーザがジョンを慕う気持ちには切羽詰まった感じがあるにはあったが、まだそれは性との意識的なつながりは全然なかった。彼女がジョンという青年に心を向けたのは、単に彼が身近にいて、妹たちとは違って、自分にそっけない態度をとっていなかったからである。

ルイーザは思い切ってジョンに手紙を書き、その夜遅く、家の者が皆寝静まった頃に、そっと階段を降りて行って、彼の部屋のドアの下にすべりこませる。手紙には次のように書いていた。

“I want someone to love me and I want to love someone,” she wrote.

“If you are the one for me I want you to come into the orchard at night and make a noise under my window. It will be easy for me to crawl down over the shed and come to you. I am thinking about it all the time, so if you are to come at all you must come soon.” (p. 97)

(『私は誰かに愛されたく、また私も誰かを愛したいのです。もし、お望みなら、夜に果樹園に入ってきて、私の部屋の窓の下で物音をたてて欲しいのです。私は小屋の屋根をつたって容易にあなたのところに行けると思っています。私はずっとこのことで頭がいっぱいなのですから、もし来てくださるのなら、すぐに来てください。』)

ところが、この手紙を書いてから2、3週間たった頃に、やっとジョンは彼女を求めてやってくる。

ジョンはルイーザを愛人として受け入れる。彼女が望んでいたのは、そういう形ではなかったのだが、ジョンの方では彼女からの近づきをそんなふうには解釈していた。それから数ヶ月後に2人とも子供が生まれそうな不安にかられて結婚する。その後も数ヶ月間、ハーデイ家で生活したが、やがて2人だけの家庭をもつ。最初の一年間は、ずっと、ルイーザは夫に、あの時に手紙を書かずにはおれなかった漠然とした渴望のことを、そして今も尚、満たされていない渴望のことを話そうとするのだが、それを理解してもらう余裕もないままに結婚生活は続く。やがてデイヴィッドが生まれる。しかし、彼女は自分で赤ん坊を育てることができず、はたして自分がこの子供を望んでいるのかどうかも分からないような気持ちがあった。ジョンが彼女のそのよ

うな冷酷さを責めると、彼女は笑いながら突慳貪に次のように言うのであった。

“It is a man child and will get what it wants anyway,” she said sharply. “Had it been a woman child there is nothing in the world I would not have done for it.” (p. 101)

(『この子は男の子だから、とにかく自分の欲しいものは手に入れますよ。もしこれが女の子だったら、私はこの子のためにどんなことだってやったと思うわ』)

第3部のクライマックスは、友人がいなくて淋しさのあまり、ルイーズが精神的な安らぎを求めて、ジョンに手紙を書いたために、彼に愛人として受け入れられた時点である。この瞬間が彼女の人生の分岐点であり、誤解の人生の第一歩である。デイヴィッドの出生は、ルイーズにとっては、誤解の派生であるが、もはや彼女は運命だと諦めざるをえないのである。

第4部 ‘Terror’ (「恐怖」) はデイヴィッド・ハーディについての物語である。

第4部の開始は円周上のIの部分である。

この物語の提示部をみてみよう。

When David Hardy was a tall boy of fifteen, he, like his mother, had an adventure that changed the whole current of his life and sent him out of his quiet corner into the world. The shell of the circumstances of his life was broken and he was compelled to start forth. He left Winesburg and no one there ever saw him again. (p. 102)

(デイヴィッド・ハーディが15歳の背の高い少年だった頃に、母親と同じように、彼もまた人生の流れがすっかり変わり、静かな片隅から世の中に投げ出されるような冒険をした。彼の生活環境の殻が破られ、彼はそこから出て行くしかなかった。彼はワインズバーグを去り、その後誰も彼を二度と見たものはなかった。)

Iの時点では、デイヴィッドが15歳であるから、ジェシーは58歳である。故に、Iと1部の提示部のAとは、同じ時点を示している。

アングラスンはデイヴィッドの失踪後について、やはり提示部という形式ではあるが、この物語とは関係がないという前提で、次の様に語っている。

After his disappearance, his mother and grandfather both died and his father became very rich. He spent much money in trying to locate his son, but that is no part of this story. (p. 102)

(デイヴィッドの失踪後、彼の母親も祖母も亡くなり、父親は大金持ちになった。父親は息子の居場所を探し出そうとして莫大な金を費やしたが、それはこの物語とは関係がない。)

この部分は円周上の最上部に位置しているJの時点である。Jの部分は、この物語の枠外と考えて、テーマの考察の後で、再考することにする。円周上のHはIの時点より数ヶ月遡った時点を示している。結局、第4部はIの時点に開始し、次にカット・バックの手法により、Hの時点まで遡り、そこからIまでクロノロジカル・オーダーにプロットは展開し、Iで物語は終結しているのである。即ち、第4部も回想形式の物語である。

デイヴィッド・ハーディが15歳になった年はどこでも大豊作だった。ジェシーはワイン・クリークの谷間の湿地帯を安く手に入れて、土地の改良に多額の金を費やす。その土地からキャベツや玉ねぎの莫大な収穫があり、しかも高い値で売れた。ジェシーは、豊作とデイヴィッドという少年を授けてくれた神に生け贄を捧げるために、小羊を白い玉のようにかたく縛り、それを馬車に乗せて、デイヴィッドを連れて森の奥へ入っていく。森の中のどこか淋しい場所で木ぎれを積み重ねて燃やし、小羊を生け贄に捧げれば、必ずや神が姿を現し、自分に使命を授けてくれるだろう、とジェシーは思う。ジェシーとデイヴィッドは黙々と馬車を進め、やがて以前に一度ジェシーが神に祈りを訴えかけて、デイヴィッドを怯えさせた場所にやってくる。デイヴィッドはその場所を思い出すと、怯えて震えだし、馬車が止まった時には、馬車をとび降りて逃げ出したくなった。ジェシーは黙り込んだまま、すぐに枯枝を集めて積み上げ、やがて火をつける。デイヴィッドは小羊をだいたまま地面に座り込む。デイヴィッドはジェシーの一挙一動が何か意味をおびているように思えて、恐怖は一瞬ごとに募っていく。

“I must put the blood of the lamb on the head of the boy.” (p. 108) (『小羊の血をあの子の頭にふりかけてやらなきゃならん』)とジェシーは呟き、ポ

ケットから長いナイフを取り出して、デイヴィッドの方へと歩いてきた。恐怖のあまりにデイヴィッドは身体が強張っていたが、すぐに小羊を解き放って、自分も逃げ出す。デイヴィッドはポケットからパチンコを取り出し、躊躇なく小石を拾うと、ゴムバンドを力一杯ひきしぼった。小石は、小羊を追っていたジェシーの頭に、命中する。彼はうめき声をあげて倒れた。デイヴィッドは祖父が死んでしまったと思い、恐怖を募らせ、泣きながら森の中を駆けてしまう。

デイヴィッドは二度とベントリー農場へもワインズバーグへも帰らなかったのである。

やがて、ジェシーはうめき声をあげながら眼を開け、デイヴィッドの姿が見えないのを知っても驚きもしない。

デイヴィッドのことが話題になると、ジェシーはぼんやりと空を見上げ、神の御使いがデイヴィッドをお連れになったのだ、と呟くだけであった。

以上が“Godliness”の第1部から第4部までの物語構成の解剖分析である。

“Godliness”の主人公と思われる3人を精神分析的に考察してみよう。

先ず、ジェシー・ベントリーを精神分析的に見ると、ここに典型的なparanoiaが描かれていることに気づく。

ジェシーは5人兄弟の末っ子で、身体つきは小柄で女性のようにであり、屈強な4人の兄達との仲もしっくりいってなくて、所謂、「除者の羊」であった。母親だけがジェシーを理解していたのである。

ジェシーは子供の頃から様々な面で兄達に引け目を感じていたために、day-dreamを見るようになったのである。体力的には兄達に太刀打ちできないので、ジェシーは学者になり、延ては長老教会の牧師になるつもりで、家を離れて学校に行っていたのである。ところが、4人の兄達が戦死して、ジェシーが農場経営のために呼び戻されることになる。見掛けはほっそりしていてまわりの人々には全く頼りないと思われたが、以前のジェシーとは違って、一種の狂信者となり、周囲の人にも、また妻に対しても冷酷で恐れられるようになっていったのである。

このようなジェシーをAlfred Adler (1870-1937)のindividual psychologyの面から解釈すると、次の通りである。

ジェシーは、恐らく幼児期から表面化する形態的ないしは機能的器官のfeeling of inferiorityに気づき、人格感の高揚という方向にその補償を求める。結論的には、ジェシーは自分のfeeling of inferiorityを補償するために、ego

と、ego を非難する super-ego との間に葛藤を引き起こすことになる。結果的にはジェシーは feeling of inferiority を補償しようとして will to power を持つようになったのである。即ち、ジェシーにとっては全身全霊を傾けて神を敬うことにより、神の下僕に、しかも神の下僕のうちでも指導者に、なろうとしたのである。熱狂的なまでに宗教心が篤いために、ジェシーは paranoia になってしまったのである。

Freud の psychoanalysis の面から分析すると、paranoia も無意識的願望とそれに対する defense mechanisms から力動的に説明が可能である。

尚、ジェシーが全身全霊を傾けて神や聖書を勉強したことと、ジェシーという名前が旧約聖書のサムエルの16章に登場するエサイと同じスペリングである、というこの2つの事実がジェシーを神の狂信者にさせることに拍車を掛けたと思われる。

次に、ジェシーのひとり娘ルイズを精神分析的に見ると、narcissitic neurosis を認めることができる。

narcissitic neurosis という言葉は Henry Havelock Ellis (1859-1939) が1898年に使用した造語である。Freud は libido が自己に向けられた状態を総称として narcissism と言っている。更に、Freud は narcissism を2種類に分けている。即ち、対象リビドーが生じる以前の自己と他者との区別のつかない幼児期にみられる primary narcissism と、人格的成長の後に、他者である対象に対して向けられていたリビドーが何らかの理由で退行して、再び自己に向けられるようになる secondary narcissism とに分けている。ルイズが narcissitic neurosis である原因は他者に向けられていたリビドーが何らかの理由で退行して自我に集中し、他の人物に向かなくなってしまった所謂、secondary narcissism によるものである。

Freud は次のように言っている。「思春期に入ると少年には性欲心理が非常に進展するが、少女においてはこの反対に抑圧の新たな（幼児的抑圧とは別の）波が認められる・・・その時、抑圧を被るのは一部の男性の性生活である。女性のこの思春期の抑圧に際して、性の禁制は強くなる。」即ち、女性は性的態度において消極的、受動的となるということであり、取りも直さず、自分自身又は自分に似たもの、自分に近いものを愛するというのである。従って、平和的、自尊的、自愛的であり、女性の恋愛態度は自己恋愛的あるいは同性愛的になるのである。

ルイズの場合は、彼女が生まれるとまもなく母親が病死したために、彼女は父親の手で育てられたのである。だが、父親は女の子が生まれたことを

喜んでおらず、しかも既に述べたように、彼の性格は衝動的で、冷酷で、空想家であったために、ルイズの幼児期に於ける精神状態は容易に想像され得る。父親とルイズとの親子関係には障害が生じ、彼らの間には優しさ、庇護性、信頼性、安全等が欠如していたのである。

ルイズは高等学校時代に下宿先の息子ジョン・ハーディに恋文を渡して逢引するようになり、やがて彼らは結婚したが、彼らの結婚生活は争いが絶えない。

この争いは勿論ルイズの性格に端を発していると考えられるが、もし夫のジョンが *Gilded Age* の *materialist* でなかったならば、彼らは互にこれ程までに精神的苦痛を味わわずに済んだかもしれない。

ジョンは、ルイズが望むものを何でも買い与え、物質的には彼女に何の不自由もさせなかった。だが、彼女が心から望んでいたものは、夫の与えてくれる金銭的、物質的なものでも、また肉欲的な愛でもなかったのである。ルイズが意識的にも無意識的にも望んでいたものは、丁度彼女の息子デイヴィッドが行方不明から発見された直後に、彼女が息子にしてやったような優しさと愛情であったのだ。即ち、ルイズはジョンに精神的安らぎを求めているのである。

次に、デイヴィッドが温和な従順な性格であるのは何故であるかを調べてみたい。

デイヴィッドは、幼い頃から父母の争いの間にたたされて、彼の心は二つに引き裂かれてしまったのである。即ち、彼は父親に味方をすべきであるか、母親に味方をすべきであるか、戸惑ってしまったのである。デイヴィッドは父親も母親をも失いたくないからである。彼は、所謂、*ambivalence* の心理をもつことになり、何事も優柔不断で、心が迷い、右にすべきか、左にすべきか、を決しかねる性格、即ち、表面的には温和な従順な性格にならざるを得なかったのである。

次に、ルイズが息子デイヴィッドの失踪を知った時、どの様な感情が彼女に働いていたかを考えてみたい。

デイヴィッドの存在はルイズの誤解の人生に派生した結果である。

ルイズは息子の出生により意識的にはもはや人生のやり直しは出来ないと諦めてしまっていたが、無意識的には誤解の人生を白紙にもどし、精神的な絆で結ばれた真の愛に基づく結婚を望んでいるのである。

故に、息子が失踪し二度と姿を見せなかったことは、ルイズには、ほっとした安堵感と、愛するわが子の失踪を痛む感情の、相反する二つの感情が、

即ちアンビヴァレンスが働いたと思われる。

即ち、息子の失踪により、ルーズは誤解の人生を断ち切り新しい人生に向かって進みたいという無意識的願望のために、何となく、安堵の感情が身体を暖めたに違いない。

もう一方の感情を説明するには、第3部の終結部を思い出さねばならない。即ち、それは「この子は男の子だから、とにかく自分の欲しいものは手に入れますよ。もしこれが女の子だったら、私はこの子のためにどんなことだってやったと思うわ」とルーズが突慳貪にジョンに言った箇所である。ルーズは自分の知っている男性、即ち父親のジェシーと夫のジョンが共に materialist であるために、男性を皆 materialist だと断定してしまい、生まれたばかりの息子までが、あたかも materialist の化身であるかの如く思っている。やがて、息子は成長して彼の欲しいものは何でも手に入れ、その対象がたとえ女性であっても、丁度、ジョンがルーズを自分のものにしてしまったように、相手の気持を無視して自分のものにするであろう、とルーズは推測しているのである。そのために、もし生まれた子供が女の子であったら、ルーズは全身全霊を傾けて、materialist から、男性から、わが子の身を守ってやったのだが、と彼女はジョンに言いたかったのである。しかし、生まれた子供が男の子であっても、いざ彼が失踪してしまうと、ルーズにとっては、やはりわが子に変わりはなく、彼女は母性愛をかきたてて、心痛を味わったに違いない。

仮に、デイヴィッドが再び彼女の所に戻ってくれば、おそらく、丁度、かつて彼が行方不明から戻ってきた時に、彼女はかつてない程の優しい態度で息子に接した様に、彼を優しく出迎え、いたわり、二度と彼を農場へは帰さずに、自分の手で温かく育てるであろう。

ジェシーは、第4部の終結部で、神様の御使がデイヴィッドをお連れになったのは “It happened because I was too greedy for glory.” (p. 109)

(『わしがあまりに栄光をむさぼり過ぎたために起きた事なのだ』) と言っている。ここには、ジェシーが materialist であったことに対する後悔の念を認めることができる。つまり、materialist になっていなければ、神様の御使いがデイヴィッドをお連れになったりはしなかったであろう、ということと言いたかったのである。更に、論を進めれば、ジェシーが狂信者になったことに対する後悔をも意味している。このことについては、順を追って見ていこう。

ジェシーは子供の頃から兄達に引け目を感じ、体力的にも劣っていたため

に、defense mechanisms が働き、外界への adaptation と内的欲動の充足との葛藤により、解決を探るのである。ジェシーは学者になり、延ては長老教会の牧師になることで、一応の解決を見出したのである。即ち、ここでの defense⁽³⁾ は精神内界の主観的安定と、外界への adaptation を同時に可能とする adaptive defense を意味している。ところが、ジェシーは熱狂的なまでに宗教心が篤いために、神の下僕に、しかも神の下僕のうちでも指導者になろうとしたのである。その結果、第4部のデイヴィッドの失踪ということになったのである。この状況が意味していることは、defense mechanisms が働き、精神内界の主観的安定は得られたが、外界への maladaptation を招くことになったのである。

次に、“Godliness”のテーマを考察する。

ジェシーは paranoia による materialist であり、ひとりの理解者も持てなかった。孫のデイヴィッドという名前は旧約聖書のエサイの子ダビデにちなんでジェシーが付けたのであろうと思われる（デイヴィッドとダビデは同じスペリングである）が、ジェシーはその孫を自分の農場に引き取って、わが子のように彼をかわいがっていた。しかし、森の中での彼の儀式を成就させることが出来ないままデイヴィッドに逃げ出されてしまい、ジェシーは心身共に疲れはてて、孤独な余生を過ごしている。

ジェシーの娘ルイーズは materialist のジョンと結婚したために、自分の求めている精神的安らぎを味わえず、夫婦間の争いが絶えない。その上、ひとり息子のデイヴィッドは彼女の父親に引き取られてしまい、ルイーズは生甲斐もなく気の抜けたような孤独な毎日を過ごしている。デイヴィッドが祖父に引き取られたことは、デイヴィッドにとっては、父母の争いから遠のいたことであり、非常に嬉しかったであろうが、彼は神の狂信家の祖父の犠牲となって、その町を出てしまい、二度と戻ることはなかったのである。

このように見てくると、この物語の主人公は誰一人として幸福な人生を歩んではおらず、彼らには誰も理解者がいないのである。彼らは孤独に耐えながら空しい人生を送っているのである。

故に、“Godliness”は‘loneliness’あるいは‘human isolation’をテーマにした作品である。

最後に、Anderson がこの物語とは関係がないという前提で語っているところの第4部の提示部の一部である円周上のJの部分について、考察する。

既に述べたが、円周上のJの時点は、この物語中の時制の最も現在に近い過去を表しており、デイヴィッドの失踪後、彼の母親のルイーズも、祖父の

ジェシーも亡くなり、父親は大金持になった、という部分である。

Anderson は、この J の部分がこの物語とは関係がない、と語っているが、それならば何故に書かなければならなかったのであろうか。

“Godliness” を文学的に解釈すれば、たしかに J の部分は除外された方がより良い、と思われる。

Anderson がわざわざ J の部分を入れたのは、それなりの理由がある筈である。それをここで考察してみたい。

J の部分を再度眺めてみよう。

ジョン・ハーディと妻ルイズとが死別した時点で、彼らの誤解の人生は終止符を打ったのである。

第 4 部の終結部では、ジェシーはもはや materialist としての資格を失って、単に狂信家としての、ジェシーが存在しているのである。その彼も既に亡くなっている。そして、生き残っているジョンは大金持ちになったということである。

これが J の部分の結果であるが、ここで注目すべき事は、ジョンだけが生き残り、他の 3 人は失踪や死へ追いやられている、ということである。言葉通り解釈すれば、生き残って大金持になったジョンはまさに materialist でワインズバーグでの勝利者と言えるであろう。しかし、これは一面的解釈にすぎない。もし、このまま、ジョンに凱歌をあげさせること以外に解釈の余地がないとすれば、Anderson は、自分が materialism の信奉者としてのレッテルを張られることを、肯定することになる。こうした社会では、金が次第に支配的になっていき、同時に人間性は軽視されるようになる。Anderson は *Poor White* で次のように言っている。

The money was an indication of superiority. There could be no doubt about that.

ジョンは *Winesburg, Ohio* におけるトム・ウィラードと同じレベルの人間で、所謂、歪になったリンゴ (twisted apple) の味を知らない恥ずべき生きものである。twisted apple は *Winesburg, Ohio* のエピソードの一編 “Paper Pills” に出てくる。要約すると次の通りである。

「秋になって、人が果樹園の中を歩くと、足もとの地面は霜で堅くなっている。樹々のリンゴは既に採取人にもがれてしまっている。リンゴは樽に詰込まれ、都市に送られて、やがては書物や、雑誌や、家具や、人間でいっぱい

のアパートで食べられてしまう。樹々には採取人が手をつけなかった節だらけのリンゴがいくつか残っているだけである。そのリンゴを少しかんでみると非常に美味しい。リンゴの横側の少し丸みをおびた部分に甘さのすべてが結集している。人は凍り付いた地面を樹から樹へ駆け回り、節だらけの歪になったリンゴをもいでポケットを一杯にしている。歪になったリンゴの甘さを知っているものにはほんの僅かの人しかいない。」

twisted appleこそ Anderson の言う正に grotesque な人間を象徴しているのである。

Anderson は grotesque について、1916年の *Masses* の2月号に掲載し、後に *Winesburg, Ohio* のエピソード全体を集約する、いわば序章の役割を果たしている “The Book of the Grotesque” の中で語っている。要約すると次の通りである。

「人間は成長するにつれて、多くの漠然とした思想の集成物としての真理を見つけ出していく。そして、自分に相応しい真理を見だし、それに執着して人生を過ごそうとした途端に、その人は grotesque になってしまう。」

アメリカの中西部においては、機械工業中心の資本主義の時代の台頭しつつあった当時、ヨーロッパの農本主義時代から工業中心の時代への移行とは違って、その変化は余りにも急速であった。従って、過去の経験から割り出した真理に執着して生きようとする人間は身心が乖離し、彼らは life を the life of reality と the life of fancy の2つのセクションに分割せざるを得ない。やがて、そこに frustration と conflict が生じる。

frustration の概念は Freud が不満に終わる性的興奮をさして呼んだのに始まるが、要するに、生活体は何らかの妨害によって、本能的衝動の満足感が阻止されている状態をいう。

conflict とは「抗争」とか「相剋」などと訳されており、一般的には external と internal の場合が考えられるが、この場合は internal の方であり、intrapsychic conflict を意味している。

grotesque になる主要原因は conventionalism による圧迫、intrapsychic distortion、sexual nature の歪曲、の3つが考えられる。

the life of fancy には道徳観念はない。Anderson は *A Story Teller's Story* で次のように言っている。

In the world of fancy, you must understand, no man is ugly. Man is ugly in fact only. Ah, there is the difficulty.

ジョンは fancy の世界で生きる必要性を感じていない人間であり、資本主義社会機構のもとで自己疎外を意識しない人間である。

もう一度 “Godliness” のテーマを思い出してみよう。そのテーマは ‘loneliness’ や ‘human isolation’ であったはずである。

Anderson が何故に ‘loneliness’ や ‘human isolation’ をテーマにしたかを考える時に、このままジョンに凱歌をあげさせてしまうことが早計であり、人間性としての勝利を握るのが真の意味での凱歌を奏すことであり、それが一体誰であるかが判明されなければならない。

materialism や出世主義等を背景とした、人間を規格化する、薄情と欺瞞で充満した社会の中で、人と人との精神的絆を大切に、人間性の回復を求めて細々と生きる grotesque な人間は、そういう社会で出世欲と物質欲にとりつかれて生きながらえている人間よりも、はるかに尊敬されるべきだ、と Anderson は考えているのである。

人間性の頹廃した世の中で、妥協点を見出して生きながらえるよりも、むしろ、人間性の回復を求めて、真の理解者を求めながら、孤独に耐えて死んでいく方が人間らしい、と Anderson は主張しているのであろう。

中西部の農本主義から工業中心の資本主義への移行は、ヨーロッパの農業時代から工業時代への移行と違って、その変化はあまりにも急速であり、そんな激動の時代に、materialism や出世主義を頼りに生きているジョンは決して心豊かではなく、無味乾燥な、空しい人生である、と Anderson は強調したのである。

故に、失踪したデイヴィッドや人と人との精神的なつながりを重視しながら、孤独に耐えて死んでいったルイーズは人間性が豊かで、grotesqueness を称えた人間であり、Anderson は彼らにこそ人間としての勝利を与えていると解釈される。

ジェシーについては、既に述べたが、第4部の終結部で materialist としての資格を失ってしまったことが語られ、遅蒔きながらルイーズの部類に仲間入りしたと解することができる。

故に、円周上の J の部分には Anderson の人生観を見ることができる。

注

(1) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (Newly edited from the original manuscripts by Ray Lewis White, The University of North Carolina Press, 1969), p. 339.

… Freud had just been discovered and all the young intellectuals were busy analyzing each other and everyone they met. Floyd Dell was hot at it. We had gathered in the evening in one of the rooms. Well, I hadn't read Freud, in fact wouldn't read him, and was rather ashamed of my ignorance.

Trigant Burrow, *A Search for Man's Sanity* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 561.

It would be easy for the Freudian-minded to see Freud as the inspiration to Anderson's work. But … Sherwood possessed insights into behavior, especially with regard to the sexual determinants of it, which arose from his own independent intuition.

(Interview with Trigant Burrow. Sept. 7, 1962)

I discussed Freud with him (Sherwood Anderson), and he knew a lot of the answers. At least he hit the high places in Freud.

(2) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: B. W. Huebsch, 1919), p. 55. (以降、この書籍からの引用は文中に頁数を示す。)

(3) Sigmund Freud, "The Neuro-Psychoses of Defence (1894)," *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* (Translated from the German under the General Editorship of James Strachey) Volume III. (London: The Hogarth Press, 1962)